神戸学院大学「子育てサロン『まなびー』」の現状と課題

道城　裕貴　　清水　寛之　　山上　榮子　　前田志壽代

1．はじめに

いつの時代でも，どのような社会であっても，子どもたちの笑顔や笑い声のあふれた様子は人々の心をなごませる。子どもは，ちょっとしたことで笑い，泣き，怒り，怖がり，悲しむ。そうした感情の豊かさを大切にしながら，子どもが少しずつ大人に近づいていくことをあたたかく見守り，励まし，支えていくにはどうすればよいのだろうか。もちろん，子どもを苦手に思う人や子どものはしゃぐ姿をうるさく感じる人もいるだろう。それでもやはり，将来の社会を担う幼い子どもたちがさまざまな経験を通じて健やかにのびのびと育っていくことを誰もが願っている。

人は，他の動物に比べても，非常に未熟なかたちで誕生し，その後も成人に達するまでに相当の時間を要することが知られている（Portmann，1951）。その間に子どもに対して多大な養育や教育のエネルギーが注がれていることは明らかである。本稿で取りあげる子育てに関連した取り組みは，現在，行われている数多くのさまざまな子育て支援活動のほんの一例に過ぎない。しかしながら，私たちは，発達心理学に携わる者として，子育て支援にかかわる活動を積極的に大学での教育と研究に結びつけ，他の多くの取り組みを参考にし，継続的に展開していきたいと考えている。

以下では，2014 年 10 月から始まった「子育てサロン『まなびー』」の概要を示し，現在までの参加者の推移及び参加傾向について分析を行ったうえで，今後検討すべき課題について考察する。

2．2015 年度の「子育てサロン『まなびー』」の活動内容および特別プログラム

まず，「子育てサロン『まなびー』」の主な活動内容および特別プログラムについて説明する。開室は，基本的には火，水，木曜日の３日間の 10 時～ 16 時であり，祝祭日，入学式，卒業式等の大学行事日，定期試験，入試，一斉休業を除く年間約 130 日となる。2014 年度は 10 月に開設したため 63 日，2015 年度は 123 日を予定している。月に平均 10.3 回実施していることになる。夏季休業の８月は４日，冬季休業や入試がある１，２月はそれぞれ７日，８日と開催日は少なくなっている（範囲：４～ 14 日）。2014 年 10 月から始まった「子育てサロン『まなびー』」であるが，半年間は予備的試験期間と捉え，それまでの利用者を中心に広報を行い，運営を行った。2015 年度は 2014 年度末に計画を練り，年間予定を立てた。2015 年４月よりこれらの活動内容および特別プログラムに関する「子育

神戸学院大学人文学部人間心理学科発達心理学領域

てサロン『まなびー』」のリーフレットを作成し，地域に配布した。神戸市子育て応援プラザ西が地域住民に児童施設や公共施設での子育て支援情報を伝える「西区の子育て支援情報」に，「子育てサロン『まなびー』」の情報掲載を依頼した。

「子育てサロン『まなびー』」の活動として，通常のプレイルームの開放では，常駐の保育士２名が保護者子連れを見守るといった「見守り保育」を行っており，子どもたちを預かる保育は行っていない。常に保護者が子どものそばにいる状態を保っている。初めや終わりの挨拶，お名前呼び，集団活動などはなく，親子連れは来たいときに来て自由に過ごして帰っていく。保育士が特定の子どもと遊ぶのではなく，全体を見渡し，常に安全管理に気を配る。特別プログラムは，水曜午後の従来の「がくせいとあそぼう（旧子育てサロン）」だけでなく，「アートであそぼう」「リトミック」「キッズヨガ」といったプレイルームの開放以外の活動である。プレイルーム開放には人数制限を設けていないが，特別プログラムには人数制限を設けており，事前登録制をとっている。特別プログラムの年間スケジュールを図１に示す。特別プログラム「がくせいとあそぼう」では，人文学部人間心理学科発達心理学領域の「発達心理学実習Ⅰ・Ⅱ」を履修する３年次生が主体となり，ゼミ（演習）ごとに活動内容を企画し，準備をして，当日のプログラムを進行する。毎年，３ゼミが開講されており，各回では約 15 名ずつが協力し合ってプログラムを実施する。学部学生が事前・事後指導や他の実習があるときには，大学院生が担当する。室内で行う四つの実習テーマ「からだをうごかそう」，「音であそぼう」，「つくってあそぼう」，「絵本の世界を楽しもう」のほかに，近隣の畑にバスで行く遠足がある。「がくせいとあそぼう」は授業と連動するため，夏季休業・冬季休業・入試などがある４月，８月，２月，３月には行わず，原則５月から１月の間に行っている（図１参照）。

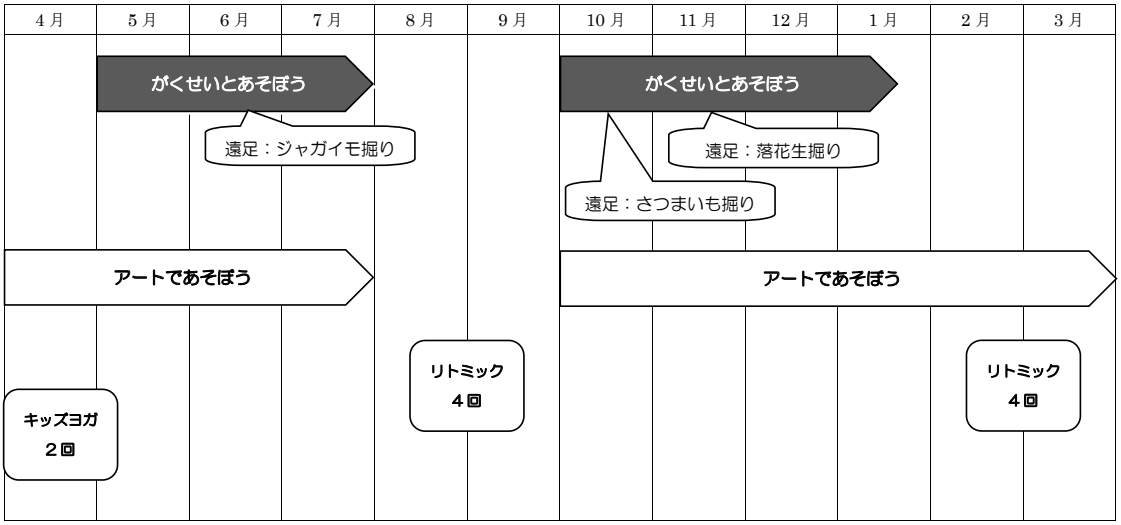

図１　2015 年度特別プログラムの年間スケジュール

特別プログラムのうち，「アートであそぼう」は，大学院授業「心理学ワークショップⅡ」と連動しており，大学院人間文化学研究科心理学専攻臨床心理学系修士課程の大学院生を中心に活動を行っている。2008 年度から月に１回のペースで実施していたが，2015 年４月より「子育てサロン『まなびー』」の特別プログラムの一つとして位置づけられた。2015 年度は，８月，３月を除いたすべての月に１回（第３火曜日）に実施する予定である。

活動では，子どもがアート素材を用いて自己表現すること，母と子がアート素材を解して交流するなどを目的にしており，指絵の具や水彩絵の具を用いて普段の生活では経験できないアート活動に取り組んでいる。一方，リトミック，キッズヨガは授業がない時期に，外部講師をお招きして連続２回，あるいは４回のシリーズで実施している。詳細は，道城・清水・小石・前田・山上（2015）を参照されたい。

３.「子育てサロン『まなびー』の利用登録

子育てサロン『まなびー』は，「プレイルームの開放」および特別プログラム（「がくせいとあそぼう」「アートであそぼう」他）の２種類がある。まず，「プレイルームの開放」に関してはメールでの事前登録は必要としておらず，来室の際に書面で必要事項を記入し，登録完了となる。メールでの事前登録も可で，一度でも来室すると「子育てサロン『まなびー』」に自動的に登録が継続するシステムとなっている。特別プログラムはその内容ごとに人数制限や登録時期が異なる。「がくせいとあそぼう」は決められたメールアドレスへの受付のみとなっており，前期（５月～７月），後期（10 月～１月）の半期ごとに決められた申し込み期間中に申し込みを行う必要がある。先着順の事前登録制であり，毎回約 40 ～ 45 組の登録を受けている。「アートであそぼう」も同様に専用メールアドレスへの受付のみとなっており，前期（４月～７月），後期（９月～２月）の半期ごとに申し込みを行う必要があるが，申し込み期間は決まっておらず随時参加を受け付けている。定員に達した場合などには断ることも多く，すべての特別プログラムにおいて申し込み開始日に申し込みが多くあり，キャンセル待ちが出ている。「リトミック」や「キッズヨガ」は外部講師の意向で本学 14 号館３階の教材準備室５という比較的小さな部屋を使用することと安全面での配慮といった理由から，人数制限を行っている。そのため登録制ではなく確実に２回あるいは４回のすべての参加できる方を優先している。「プレイルームの開放」に来室し，「子育てサロン『まなびー』」の登録が済んでいる保護者に対しては，定期的に特別プログラムのお知らせを送っている。現在までの「プレイルームの開放」のみの利用登録者は 117 組（子ども 153 名）であった。これは 2014 年までの旧子育てサロン参加者もすべて含まれるため，非常に多かった。「がくせいとあそぼう」の 2015 年前期の利用登録者は 36 組（子ども 51 名）であった。「アートであそぼう」の 2015 年前期の利用登録者は 18 組（子ども 22 名）であった。特徴としては，きょうだいが多く，第１子が生後数ヶ月のときに参加した保護者子はその子が幼稚園や保育園に上がるまで数年間にわたって継続して通っていることが挙げられる。「プレイルームの開放」のみの利用登録者における子どもの平均月齢は 32.7 ヶ月（2.7 歳），「がくせいとあそぼう」の子どもの平均月齢は 33.6 ヶ月（2.8 歳），「アートであそぼう」の子どもの平均月齢は 31.2 ヶ月（2.6 歳）であった。いずれにおいても就園前の２，３歳の子どもが多く，幼稚園に行き始める前に参加しているようである。

４.「プレイルームの開放」の参加者と参加傾向

まず,「子育てサロン『まなびー』」が正式に開始した 2014 年 10 月から現在までの「プレイルームの開放」における参加人数と参加傾向について分析した。2014 年度後期から 2015 年度前期までの月別のべ参加人数を図２に示す。2014 年 10 月から 2015 年１月にかけて徐々に減少し，同月の８日間の開室ののべ参加人数は子ども 18 名（平均 2.3 名），保護者 14 名（1.8 名）であった。つまり，１日開室していても多くて３，４名しか来室していない状況であった。これは，2014 年度後期は試験段階と考え，現在までの利用者を中心に広報を行った影響であったことが考えられる。10 月という時期に開始したため保護者がすでに予定していたスケジュールを変更できなかったことや，３日間拡張し，プレイルームの開放を行う旨の地域での広報をしていなかったこと，寒い時期に入り，インフルエンザの流行などの影響を受けたことが考えられる。しかし，夏季に向けて着実に参加人数は増加していった。これは，2015 年３月から４月にかけて，神戸市の協力を得て，広報活動に力を入れたことによる影響が大きいと考えられる。2015 年９月の 12 日間の開室においては子ども 64 名（5.3 名），保護者 50 名（4.2 名）と再び減少した。これは幼稚園の申し込みやきょうだい児の学校園の行事などが重なったためであることが考えられる。その他，保育士から，時期に関係なく雨天や降雪など天候の悪い日は，参加者がほぼ０に近くなることも報告があった。

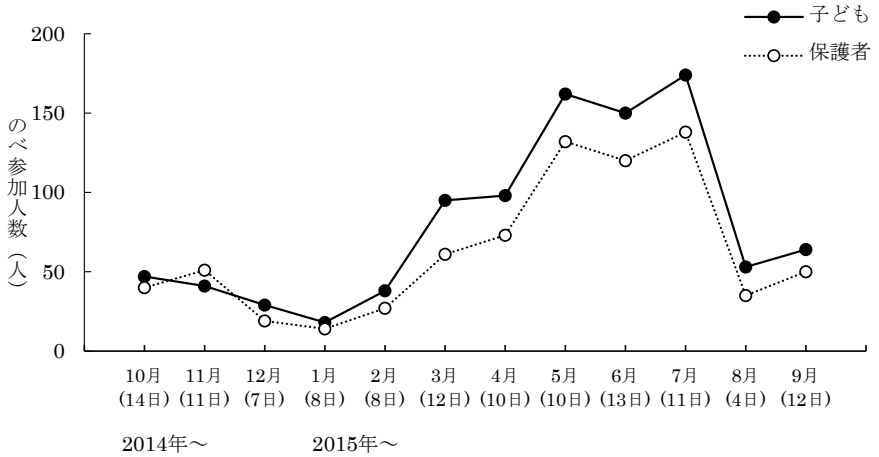

図２　2014 年度後期（10 月）～ 2015 年度前期（9 月）までの月別のべ参加者数の推移
カッコ内の数値は開催日数を示す。

５.「がくせいとあそぼう」の参加人数の推移

2011 年度は 2011 年５月～ 2012 年３月まで（全 27 回），2012 年度は 2012 年５月～ 2013 年２月まで（全 28 回），2013 年度は 2013 年５月～ 2014 年２月（全 28 回）まで実施した。2014 年度は 2014 年５月から 2015 年１月（全 25 回）まで実施した。2015 年度は 2015 年５月から 2016 年１月（全 22 回）を予定しており，本稿では前期の 11 回終了時点

までの結果を載せる。2011 年度から 2015 年前期までの「がくせいとあそぼう（旧子育てサロン）」ののべ参加人数の変化を図５に示す。2011 年度から 2013 年度にかけて，年々参加人数が増加している。2015 年前期は 11 回にも関わらず，子ども 184 名（平均 22.9 名），保護者 252 名（平均 16.7 名）とすでに参加しているため，2014 年度（現在の平均は，子ども 23.4 名，保護者 19.2 名）を上回ることが予想される。

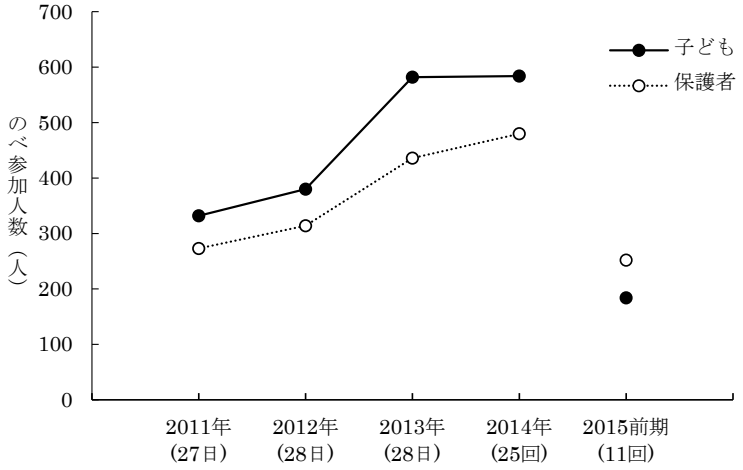

図３　2011 年度から 2015 年度前期までの「がくせいとあそぼう」のべ参加人数の推移
カッコ内の数値は開催日数を示す。
2015 年度は前期のみのデータである。

６．今後の課題

以上のように，「子育てサロン『まなびー』」は継続的に活動を展開しているが，現在のような形態で活動運営がなされるようになって，まだ１年と少ししか経過していない。しかし，この時点で問題点や検討事項を整理しておくことは，今後のために重要であると考えられる。

６-1　施設・消耗品

「子育てサロン『まなびー』」で使用している施設のある建物（14 号館）が完成したのが 2004 年３月末であり，本稿の執筆時点（2015 年 10 月）で 11 年経過している。建物自体の老朽化はほとんど起きていないが，すでに行動観察室内の撮影記録装置（ビデオカメラ等）は入れ替えている。新たに壁面にディスプレイを設置した。2014 年の 10 月に幼児用トイレおよび手洗い場（冷水）を室内に設営した。ただし，温水シャワーの設備や洗濯機がないので，乳幼児の排泄に関わる処理が難しい。

大人用のトイレは同じ階のエレベーター横にあり，学生と共用しているため，距離が遠い。そのため，保護者がトイレを利用するときは，必ず誰かに子どもを預かってもらう必要がある。

特別プログラム「がくせいとあそぼう」の 2015 年後期の利用登録者は前期の 36 組から 45 組に大幅に増加しており，集団プログラムを実施するには行動観察室が手狭になっている。その場で使用しない教材教具を収納する倉庫がなく，現在は記録制御室（マジック

ミラー越しに観察ができる隣接した小部屋）の一隅に保管している状態である。同じ建物内に保管専用の倉庫を設けるのが望ましい。

6-2　安全管理・保険

今までのところ，子ども同士の些細なトラブルはあるが，怪我をするなどの大きな事故は起きていない。万が一のために，「子育てサロン『まなびー』」の参加者全員に傷害保険をかけている。遠足などの学外に行く際には，別種の傷害保険をかけている。子ども同士のトラブルなどで怪我が生じた場合は，速やかに本学の医務室（大学会館１階）に連れて行くようにスタッフ内で周知徹底している。その後，適宜，保護者が医療機関での処置を受けるよう勧めている。その際の医療費に関しては，保険で対応することになる。

発達心理学領域の学生については，麻疹と風疹の抗体検査を義務づけ，予防接種を受けるように推奨している。本学事務局管財グループとの協議により，抗体検査の費用（約５千円）は実習費から支出しているが，予防接種の費用（約８千円）は学生負担となっている。実習においては，インフルエンザなどの感染症に関しては学生自身にも注意を呼びかけ，子どもと直接関わらないように実習を見学するなどの適切な対応を求めている。

現在，利用登録者とは専用のメールでやりとりをしており，緊急時（災害時等）にはスタッフからすぐに連絡がいくような体制を取っている。気象警報などが発令された場合には，乳幼児の安全面を最大限に配慮し，大学の授業措置の方針よりもさらに慎重な判断を行っている。

個人情報の管理には，最大限の注意を払い，利用登録者全員から書面で同意を得ている。同意内容は，「子育てサロン『まなびー』」に参加することに伴って学術的な研究・調査および大学広報に協力してもらい，事前の個別承諾を得たうえで個人情報の一部が利用されることがあるというものである。特別プログラム「がくせいとあそぼう」においては，年度半期ごとの登録になるため，登録時に毎回，同意書の署名を求めている。

本学の他学部，他学科，あるいは外部の機関･施設関係者からの見学希望が絶えないが，常駐の２名の保育士には対応が難しく，事前に教員が見学を許可するかどうかを個別的に判断している。教員も授業等で不在のときがあるため，すべてに迅速に対応できているわけではない。2015 年４月より行動観察室に専用の電話を設置したが，火・水・木曜日の 10 時～ 16 時までの対応となるため，十分な連絡体制が取れていない。

6-3　教育面での充実

現在，特別プログラム「がくせいとあそぼう」については，「発達心理学実習Ⅰ・Ⅱ」において発達心理学領域の３年次生に担当回の前後の週に，必ず事前準備と事後指導の時間を設けている。しかし，年間スケジュールによっては他の実習との関連で，事前準備の時間が十分に取れない場合や，学生自身が納得のいくまで練習を重ねるのに時間が足りない場合がある。その際は，学生が主体的に授業時間外に準備を行っている。

授業では同じ階の教材準備室３を「がくせいとあそぼう」の準備のための教室として利用しているが，他の授業で使うこともあるので専用の作業スペースが必要である。特別プ

ログラムによっては，教材作成のための紙や布などの材料，文具類なども十分であるとはいえない。

「がくせいとあそぼう」では動きやすい服装（ジャージなど）で参加するように学生に指導しているが，現在は専用の更衣室がなく，同じ階の小実験実習室１～６を更衣室として代用している。他の授業との関連で常にこれらを利用できるわけではなく，鍵がかかるロッカーもないので，専用の更衣室の設置が望まれる。

6-4　他の団体や機関との連携

現在は，特別プログラム「がくせいとあそぼう」において，年に３回（６月･10 月･11 月），遠足を企画している。いずれも一般社団法人あとりえクルレの所有する畑で，親子連れとともに，じゃがいも掘りやさつまいも掘り，落花生掘りといった農作業を体験するという機会を提供し，参加者と学生から好評を得ている。これはひとえにあとりえクルレの好意によるもので，限られた授業時間内（90 分）で農作業が円滑に進むようにあらかじめ準備をしてもらっており，農機具等もすべて無料で利用させていただいている。当日はあとりえクルレの代表者と農業指導者には，専門的知識の提供として謝金を支払っているが，十分とは言えない。

このことはリトミックやキッズヨガなどの他の特別プログラムを担当する外部の専門家に対しても同様である。特別プログラム当日の謝金のみとなっており，準備や前後のスタッフとの打ち合わせ等に対して謝金は支払われておらず，ボランティアとなっている。

さらに，神戸市内には本学の「子育てサロン『まなびー』」と同様の子育て支援事業を展開している大学が６大学あるが，現在のところ，見学・交流・情報交換などはまだ行っていない。今後は，それらの大学との連携の可能性を探り，「子育てサロン『まなびー』」のさらなる充実を図っていきたい。

付記

本研究は，2015 年度人文学部研究推進費による研究助成を受けた（研究代表者：道城裕貴，研究分担者：清水寛之・山上榮子・前田志壽代，研究題目「乳幼児の保護者と支援学生への質問紙調査に基づく子育て支援活動に関する心理学的研究」）。

引用文献

［１］ 道城裕貴・清水寛之・小石寛文・前田志壽代・山上榮子（2015）．神戸市「地域子育て支援拠点づくり」事業にもとづく神戸学院大学「子育てサロン『まなびー』」の基盤整備．教育開発センタージャーナル，6, 77-89.

［２］ Portmann, A. (1951). *Biologische Fragmente zu einer Lehre vom Menschen*. Benno Schwabe.（ポルトマン , A.　高木正孝（訳）（1961）．人間どこまで動物か－新しい人間像のために－　岩波書店）